

C 2 審判長

黒須真希

1、採点上打ち合わせた事項

(監督会議での報告事項も含む)

① 適用規則の確認

採点規則 2017 年版 変更規則 I

女子体操競技情報 28 号

② 採点指針の確認

③ 新技申請

なし

④ 監督会議の連絡事項

・D スコアに対する質問について

そのローテーションの間に D1 へ口頭で質問をする。意見の相違がある場合は、書面で審判長へ

・不適切なマグネシウムの使用について

・平均台表面上への水の使用について

・器械器具の準備について

・跳躍や演技を試みない場合について

・コーチの行動について

2、採点上起こった事項とその処理

競技中に非常ベルがなった。誤報だったことが確認できたため、各種目の D1 審判にベルがなった時に演技中だった選手がいなかったかを確認、演技中だった選手がいなかったの
で、再演技等の措置をとることもなく競技の進行に影響することはなかった。

3、その他 特記事項・意見・感想等

審判業務全般においては、D1 審判を中心にスムーズに採点業務を進めることができ無事
競技を終えることができた。開催県の役員の皆様の心配りや手厚いサポートをしていただ
いたことがスムーズな大会運営に繋がったと思っている。

出場選手は、冬季練習期間に練習してきた技を積極的に演技構成に組み入れて挑戦して
いた印象だった。3 月というまだ寒い時期で競技会へ出場できるところまで仕上げるのが
難しい時期だが、よく練習してきている選手が多かったように感じた。

課題としては、全体的に完成度が低いことが挙げられる。失敗が多めだったこと、多くの
場面で着地に余裕がないこと、技の準備動作が長いことなど感じるが多かった。これか
らの競技会へ向けて完成度を高め、余裕のある演技ができるように練習してもらいたい。

C 2 跳馬

D 1 審判員 山下憲子

1. 採点上打ち合わせた事項

1) 適用規則の確認

2017年版採点規則 変更規則 I 情報28号までを適用

2) 採点指針の確認

情報28号跳馬採点指針「Dスコアの高い跳躍技の実施」「姿勢欠点のない完成度の高い跳躍」「高さや距離を伴うダイナミックな跳躍」「着地の体勢が高く、安定した着地」をもとに、跳躍の大きさだけではなく、技の難易度から受ける迫力や雄大性なども加味し、ダイナミックさに欠ける跳躍は「ダイナミックさに欠ける-0.1/0.3/0.5」を有効に使用して明確に差をつける。

3) アシスタント、セクレタリーの任務

線審：練習回数カウントの確認

境界線の踏み出し0.1/0.3の減点の確認

コーチからの再確認の要求に対応できるよう、すべての過失は記録しておく

2. 採点上起こった事項とその処理

特になし

3. その他特記事項・意見・感想等

跳躍総数99(跳躍実施選手52名)中の跳躍技実施状況は以下の通りであった。

跳躍技番号	跳躍技	Dスコア	跳躍数
2. 10	前転とび～前方かかえ込み宙返り	4. 00	9
2. 20	前転とび～前方屈身宙返り	4. 20	16
3. 10	かかえ込みツカハラとび	3. 50	2
3. 20	屈身ツカハラとび	3. 70	13
3. 12	かかえ込みツカハラとび1回ひねり	4. 10	12
3. 30	伸身ツカハラとび	4. 20	7
3. 32	伸身ツカハラとび1回ひねり	4. 80	6
3. 33	伸身ツカハラとび1 1/2 回ひねり	5. 20	1
4. 20	ロンダート後転とび～後方屈伸宙返り	3. 50	5
4. 30	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り	4. 00	3
4. 32	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り1回ひねり	4. 60	19
4. 33	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り1 1/2 回ひねり	5. 00	5
4. 34	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り2回ひねり	5. 40	1

今大会においては、ロンダート後転とび～後方伸身宙返り2回ひねり(4.34)の跳躍技にチャレンジした選手は1名しかいなかったが、第2空中局面で1回以上のひねりを伴う宙返りの跳躍技(跳躍技番号4.32、4.33、4.34、3.12)を実施した選手の跳躍総数は37(全体の約37%)であったことから、全体的にはDスコアの高い跳躍技に取り組んでいる傾向であると言える。しかし、姿勢欠点が多い跳躍や完成度の低い実施も見られた。今後、改善に向けて取り組んでほしい。

跳躍技番号2.10、2.20、3.10、3.20、3.12、4.20など、第2空中局面でかかえ込み、または屈身姿勢で実施する跳躍技については、「身体の伸ばしが不十分または遅い」実施が多かった。さらに、「ダイナミックさに欠ける」減点を適用される選手も多く、そのためEスコアが伸びない結果となっていた。

今年度採点指針であるDスコアの高い跳躍技の実施を目指して今後さらにトレーニングを積み、伸身宙返り、さらにはひねりを伴う跳躍技へと発展させていくことを期待したい。

C2 段違い平行棒

D1 審判員 木村幸代

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・情報28号採点指針3項目を読み直し、指針に沿った演技を評価することを確認した。
 - － 腕の曲がり、膝やつま先のゆるみのない美しく伸びた体線での実施
 - － 空中局面を伴う技の大きさとひねりを伴う技の正確な実施
 - － Dスコアの高い演技構成
- ・指針に沿わない未完成な演技には、第8章の一般欠点と減点表の減点項目、第11章の「構成減点」「種目特有な実施減点」、そして変更規則Iにある「前向きでない構成」の減点を有効に使用し、採点を行うことを確認した。
- ・「短い演技」とD審判団が判断した場合、技の実施数によりEスコアの最高点が変わるため、その都度、E審判団へ口頭にて伝えることを確認した。
- ・アシスタント(計時審)の任務内容を確認した。落下による中断時間の計測は、選手が落下後マットに立ち上がったときから始まるが、計測を開始することを避けるために故意に足から立ち上がらない場合の対応について確認をした。また、コーチからの計時の減点の再確認にはすぐに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことをお願いした。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 「演技の間(審判員が前の選手のスコアを算出している時間)」での器械器具の準備を、コーチ・選手・他選手のコーチの3名で演技台に上がって行っていたため、口頭にて注意をし、2名で準備を行ってもらった。
＜情報28号、練習時間の後や「演技の間」では、器械器具の準備(段違い平行棒では最大2名上がることができる)はできるが、使用することはできない。＞

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会、D・E難度の空中局面を伴う技や棒間の移動技、CV(組み合わせ点)を獲得できる組み合わせ、D難度の終末技に積極的に取り組む選手が多く見受けられたように思います。変更規則Iの競技とはいえ、今大会の最も高いDスコアは「6.2」、「5.5~5.7」の選手も4名いるなど、指針に沿った演技構成に向けて、冬場の各選手の努力が伺える大会だったと感じます。今後も、高いDスコアの獲得を目指すとともに、け上がり・後ろ振り上げ倒立などの基本技を大切に、体線の美しい体操を目指して欲しいと強く願います。

挑戦ゆえの失敗もいくつかあり、なかには、怪我につながってしまった選手がいたことは残念でした。怪我の回復を願うとともに、次の大会では、正確な実施そして完成度の高い演技に期待したいと思います。

また、採点規則の変更、修正等は「情報」という形で通達されています。以前の大会では認められていたことが、今大会では認められないということもありますので、選手自身が規則を理解し、大会に臨む必要があるのではないかと思います。競技中の説明や注意は、演技にも支障をきたすかもしれません。時には減点という形で対応しなくてはなりません。気持ちよく演技をするためにも、選手自身が規則を知る努力をして欲しいと切に願います。

C2 平均台

D1 審判員 志村美紀

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 適用規則の確認

2017年度版採点規則 変更規則I 情報28号までを適用

(2) 採点指針の確認

「姿勢欠点がなく正確なダンス系の技の実施」「立ち姿勢も含め、常に美しい姿勢での演技」「技の前の「調整」や「停止」のない流れのある演技」「Dスコアの高い演技構成」以上4項目の指針をもとに、特にダンス系の技においては、姿勢欠点のある実施、

正確性のない実施に対して厳密に減点することを確認した。

(3) Eスコアの確認

種目特有な実施減点、ダンス系での身体の姿勢「0.1/0.3/0.5」、調整、停止の減点項目について確認した。

(4) アシスタント任務の確認

演技時間、練習時間及び中断時間の計測方法について確認した。

2、採点上起こった事項とその処理

Dスコア（ダンス系の技の承認）に対する質問1件あったが、承認欲求を満たせていなかったため、承認できない旨を口頭にて監督に説明した。

3、その他 特記事項・意見・感想等

今大会においては、組み合わせ点・シリーズボーナス及び、D難度以上のダンス系に取り組んでいる選手が多く見られた。また、Dスコア「5.5以上」を獲得した選手が17名（内6.0以上4名）と、昨年度同大会12名と比較し、多くの選手がDスコアの高い演技構成に取り組んでいることがうかがえる。また「両足踏み切り前後開脚とび 1/2 ひねり（横向き実施・D難度）」の実施については、多くの選手が情報28号の内容を踏まえて、技の踏み切り動作を修正し正確に実施できていた。

しかしその一方、Eスコアについては「8.0以上」6名、「8.0～7.0」22名、「7.0未満」25名という結果で、落下も含めて減点の多い選手が多かった。なかでもダンス系の技については、「身体の姿勢の減点 0.1/0.3/0.5」に加えて、「高さ 0.1/0.3」「正確さの減点 0.1」が適用されるような不正確な実施が多く、減点につながっている演技が多かった。また、今大会では、「片足踏み切り、前へ脚交差した前後開脚とび上がり（D難度）」や「両足踏み切り、前後開脚とびから輪（D難度）」に挑戦している選手も多数いたが、正確に実施できている選手は少なかった。ダンス系の技の減点について今一度確認し、理想像を見据えて練習に取り組んでほしいと感じた。

演技全体を通しては、「胴の一部が台に接する平均台に近い動き/技の組み合わせがない」という点において、情報28号に即した動きになっていたり、技と技の間のつながりが滑らかであったりと、演技構成を工夫しているように感じられた。ただし、技の前に調整や停止が入り、流れのない演技も見受けられたので、ぜひこれからの課題として取り組んでいっていただきたい。

C 2 ゆか

D 1 審判員 白川千尋

4、採点上打ち合わせた事項

1) 適用規則の確認

2017年版採点規則変更規則I、情報28号までを適用。

2) 採点指針の確認

2019年度採点指針により、姿勢欠点がなく正確なダンス系の技の実施、常に美しい姿勢での演技、流れのあるダイナミックな演技、芸術作品として完成度の高い演技、Dスコアの高い演技構成の5つの指針を確認した。ダンス系の技に対しては「身体の姿勢の減点」「正確さ」の減点を厳密に減点すること、指針の内容に沿わない演技に対しては第8章および第13章の減点項目に則り、Eスコアにて差をつけることを確認した。特に今年度は高いDスコアを有する演技であっても、正確で確実な実施でなければ評価できないという方向性を確認した。

3) アシスタント、セクレタリーの任務の確認

- ・計時 練習時間の確認、演技開始までの時間および演技時間の計り方の確認
- ・線審 判定ラインの分担、0.1/0.3の場合の減点を確認
計時、線審ともにコーチからの再確認に対応できるよう、記録しておくことを確認。
- ・セクレタリー 演技毎にD1審判員による確認後、得点決定とすることを確認

5、採点上起こった事項とその処理

特になし

6、その他 特記事項・意見・感想等

今大会における上位3選手の得点は1位13.90 (D5.5、E8.40)、2位13.80 (D5.6、E8.3、減点0.1)、3位13.6 (D5.6、E8.0)であり、Dスコアが高く、なおかつ完成度の高い演技をした選手が上位となった。高いDスコアを有する演技の特徴として、E難度のアクロバット系の技やD難度のダンス系の技によって難度点合計を上げているという傾向であった。

Eスコアに関しては、アクロバット系の技の着地の姿勢と余分なステップの減点、個々のダンス系の技の減点といった点において、正確で確実な実施を目指している演技と完成されていない演技の差がスコアに反映された。芸術性においては、音楽や個性に調和した振り付けの工夫が感じられる演技が多く見られた。一方で、選手自身が十分に表現しきれていない演技もあり、そういった演技のほとんどは身体を最大限に使って動くことができず、演技全体を通しての身体の姿勢の減点を伴うものであった。

今後は今一度選手コーチが採点指針を理解し、正確で確実な技の実施に基づいた高いDスコアと高い芸術性を目指してトレーニングに励んでいただきたい。

最後になりましたが、今大会の開催にあたりご尽力頂きました大会役員、関係者の皆様に、心より感謝し、御礼申し上げます。